

「行動の10年」の新たなステージへ

持続可能な  
社会実現に向け  
加速する「連帯・連携」



関西学院大学  
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY

地域や企業との連携を通じて  
“Mastery for Service”に基づく  
SDGsの推進を目指す





最先端の技術を活用することで  
臨場感溢れる校外体験を実現  
関西学院大学教育学部の丹羽登教授は、富士通株式会社などと連携して2019年度に「5GやVR・水中ドローン等の先端技術を活用した遠隔授業プロジェクト」を実施した。

## 5GやVR・水中ドローン等の 先端技術を活用した 遠隔授業プロジェクト

### 関西学院大学



プロジェクトのメインとなったのが、水族館と連携した遠隔校外学習だ。入院中の子どもたちが、病院から水族館の大水槽内にある水中ドローンを遠隔操作したり、水槽内のダイバーが手にした360度カメラの映像をVRゴーグルで鑑賞したりすることで、水中の生き物を観察。病院の外に出ることができない子どもたちの校外体験を可能にした。イワシの群れやジンベエザメを間近に捉えた映像に子どもたちは「思った以上にきれいに見える」「ドローンを操作するのが楽しい」と夢中になった。

丹羽教授の専門は特別支援教育（病気や障害のある子どもへの教育）だ。ICT教育の研究

2015年に採択された持続可能な開発目標(SDGs)。

2030年の目標達成期限に向けて、間もなく折り返し地点を迎えることとなる。

ここ数年でSDGsに対する人々の理解は急速に深まり、

全員で世界規模の課題に対峙する機運が着実に醸成されてきた。

今後はその理解を礎に、「行動への転換」が求められるフェーズと言えるだろう。

コロナ禍による逆風を乗り越えて

私たちは次にいったいどのような行動を起こしていくべきなのか。

一人ひとりができることには限界がある。

そこで鍵となるのがソリダリティ、多様な行動主体による連帯・連携だ。

国際社会や地域社会において、SDGs達成に向けた連携がすでに広がりつつあり、

社会貢献を使命の一つとする大学においてもそうした動きが加速している。

いま大学はどのような未来を見据え、どのようなアクションに取り組んでいるのか。

その姿をヒントに、ソリダリティを軸にした行動のあり方をひも解いていく。

# 「ソリダリティ」の力で 行動の10年を切り開く。



### SDGs行動の10年

2020年1月、アントニオ・グテーレス国連事務総長の呼びかけで「行動の10年」がスタート。

2030年までの10年間で真に持続可能な社会を実現するべく、国際／地域／個人の3つのレベルにおけるアクションの加速化と対話による連携が求められている。

に取り組むようになったきっかけについて、次のように語る。「大学卒業後、教諭として勤務していた際に1人の教え子が亡くなるという経験をしました。その子は重度の障害によりコミュニケーションをとることが難しく、体の不調を周囲に伝えることができなかったのです。こうした問題にICT等を活用して、体調を客観的にも把握することはできないだろうかと考えたのが、今の研究の始まりです」

教育へのICT活用で広がる  
子どもたちの可能性

今回のプロジェクトは、「第4回ジャパンSDGsアワード『パートナーシップ賞(特別賞)』」「IAUD国際デザイン賞2020金賞」、「第14回キッズデザイン賞」といった数々の賞を獲得し、注目を集めている。丹羽教授はこの成果について「私は入院などの理由で行動制限がある子どもにも、しっかりとした教育の機会を用意する必要性を強く感じています。SDGsという世界共通の



丹羽 登

関西学院大学教育学部 教授

小学校や特別支援学校での勤務を経て、2006年より文部科学省初等中等教育局特別支援教育課に特別支援教育調査官として勤務。2015年より現職。専門は特別支援教育。

テーマが生まれたおかげでプロジェクトが注目されていることには、非常に大きなメリットがあると思います」と語る。現在は水族館だけでなく海中を撮影するプロジェクトが進行中で、今後もさらなる挑戦を続ける予定だ。丹羽教授は「ICTを活用することで、教育機会を奪われている子どもたちに自信を持たせてあげたいのです」と熱を持って話す。病気や障害のある子どもだけでなく、すべての子どもの教育の可能性を広げる丹羽教授の研究にますます期待が高まっている。



関西学院大学  
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY

## スクールモットー“Mastery for Service”のもとに 地域や企業との連携を通じてSDGsを推進



学生の手で植えた大麦が生い茂るリコロボファーム

保全プロジェクトから活動を開始し、現在の所属学生数は約50名におよぶ。学生一人ひとりが「自然とのつながりが薄れ、環境問題が深刻化する今、自分たちにできることは何か」という問いに真剣に向き合いながら、人と人、人と自然のコラボレーションを通して、自分自身と社会の発展を目指す、充実した場となっている。

2021年から始まった1年間の活動で、主として2つの活動に取り組んできた。1つ目が、神戸市北区に位置する耕作放棄地の再生である。草を刈り、土をおこし、畝を立てて作物を育てることで、近年急速に減少する里山の保全を推進。リコロボファームと名付けられたこの場所には、リコロボのメンバーだ



けでなく神戸市の職員や地域住民、さらには活動に共感するさまざまな人が訪れ、新たな交流が生まれる場となっている。2つ目はブルーカーボンに関する取り組みである。CO<sub>2</sub>吸収源として近年世界的に注目されているブルーカーボン。その普及を目的として、2021年10月神戸市須磨海岸で「ブルーカーボンフェア」が開催された。リコロボは須磨里海の会やNPO法人アマモ種子バンクなどと連携し、ブルーカーボンに用いられる海藻の一種、アマモの種子選別や移植を実施。同フェアの参加者にも作業を体験してもらうことで、ブルーカーボンの啓発に取り組んだ。また神戸市兵庫区の鳥原貯水池では、同市水道局による淡水域でのブルーカーボン事業に参加。2021年秋には、ササバモという水草の苗床の植栽を行い、(株)自然回復の協力のもとでササバモを食い尽くしてしまう外来種のカメの駆除にも取り組んだ。海と山のブルーカーボンの活動については、朝日新聞社、神戸市、リコロボの協働によって完成した朝日新聞DIGITAL LOG連携サ

### 学生の声

リコロボで活動する中で最も驚いたのは、役割や年齢にかかわらず発言できる環境です。リコロボに参加して一カ月も経たない頃に提案した「里山で養蜂する」という案が瞬間に採用され、私は班長を任せられました。リコロボでは失敗を恐れることなく発言でき、発案に対してメンバーが能動的に協力するという土壌があります。そのおかげで多くのアイデアの種が生まれる、活発な団体になっていると感じます。



商学部3年 井上 大地さん

イト「k o d o」に、学生自らが作成した記事と動画が掲載されている。このように、環境保全への多様な取り組みを神戸の里海・里山から発信している。地域の人だけでなく、さまざまな企業や団体と連携しながら活動を展開するリコロボ。今後は小中学校への出前授業や高等学校の探究学習、さらには大学のPBL型授業のコーディネー

学生が主体のプロジェクトでSDGsへの貢献に取り組む

関西学院大学ではスクールモットー「Mastery for Service」(奉仕のための練達)に基づき、学生・教員・職員が一人ひとりの立場からSDGsに貢献することを重んじている。正課ではSDGsへの理解を深める入門科目を開講すると共に、ビジネスや国際関係などの専門領域における実践的な学びにも注力。また、正課内外を問わず学生と地域や企業の連携プロジェクトが活発に行われており、学生のSDGsへの関心はますます高まっている。今回は同大学で推進されているプロジェクトの中から4つの特徴的な取り組みを紹介する。

### 大学生の手で地域の自然を守る Re.colab KOBEの挑戦

里山・里海の再生に向け活動する関西学院大学の学生団体Re.colab KOBE(通称・リコロボ)は、2021年4月に同大学社会学部松村淳准教授のもとで発足。神戸市と協働する環境

トといった取り組みも実施する予定だ。また、参加が決定している関西万博の共創チャレンジには、関西学院大学や日頃の活動で関わりのある朝日新聞社、神戸市も登録されており、さらなる連携強化が期待される。万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」の実現に向けた、学生たちの新たな取り組みに注目したい。

### Re.colab KOBE 制作協力



- |      |  |                               |
|------|--|-------------------------------|
| 統括   | 社会学部 3年<br>永山 菜花さん                       | 社会学部 2年<br>太田 帆香さん            |
| 記事執筆 | 文学部 3年<br>出口 真愛さん<br>社会学部 3年<br>矢野 まなみさん | 社会学部 3年<br>前 遥菜さん             |
| 写真選定 | 社会学部 3年<br>船引 香歩さん                       | 大阪府立大学<br>生命科学部 2年<br>高田 将之さん |

University Information

関西学院大学 Kwansai Gakuin University

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一丁目1-155

URL:https://www.kwansai.ac.jp/



SDGsをテーマにした産学連携で、学生の成長のフィールドを広げる

産学連携事業として実施されている、マーケティングを学ぶ大学生による企画コンテスト「Student Innovation College (通称・Sカレ)」。多数の参加企業がそれぞれのテーマで商品企画を募集し、学生たちはその中から好きなテーマを選んで企画を提出。テーマごとに1つの企画のみが採択され、およそ1年かけて商品化に取り組む。

2020年度のコンテストでは、株式会社日本旅行がSDGs達成に向けた取り組みの一環として、観光資源の保全を通して将来にわたり持続できる旅行商



滋賀県栗東市「フォレストアドベンチャー・栗東」にて

際交流や国際問題に興味・関心のある高校生28名が参加。2020年度に続き宿泊を伴うイベントは実施できなかったが、15回目の開催となった。2021年度のスローガンは「Distance But Not Distant」(離れていても心はひとつ)。自由に人と人が会うことが難しいコロナ禍において、物理的な距離があるからこそより深く丁寧な人と人の関わりを持てるのではないかという期待が込められた。同プログラムの企画・運営を行うのは関西学院大学の留学プログラム参加学生・参加予定学生を中心とする学生団体 Kwansai Gakuin Global Inspiration with High school (通称・KGIH) の学生31名。学生たちはレクリエーションやディスカッションの様子を西宮上ヶ原キャンパスから発信し、自宅や高校から参加する高校生たちをサポートした。

開会式が執り行われた後、KGIHのOBで、ミュンヘン工科大学大学院生、ブルームバーグサマインタン(当時)の入山竜之介氏による講演会を実施。その後、SDGsの目標4「質の高い教育をみんなに」の中

品の企画を募集した。17校の大学生による応募の中から1位に輝いたのは関西学院大学商学部石淵順也教授ゼミの学生による「3 R Trip in 滋賀」のプラン。3 R (Reduce・Reuse・Recycle)をテーマに、地球環境に貢献しながら家族で楽しくSDGsを学んでもらうコンセプトの旅行商品だ。滋賀県内6施設の協力により、4つの体験と2つの食事をオプションメニューにした。ツアー企画後は、大学のSNSでの情報発信のほか、株式会社日本旅行の情報サイトでの紹介や、神戸新聞への記事掲載を通して消費者への宣伝を強化。その結果コロナ禍にもかかわらず、ツアー販売期間中の滋賀県への旅行需要にも影響を見せ、ツアーを主催する株式会社日本旅行には、サステナビリティに関心の高いZ世代を中心に多数の問い合わせがあるなど、商品化による反響は非常に大きなものとなった。

石淵教授は同プロジェクトを振り返り、次のように語る。「しっかりと座学を行ったうえで実践することが、学生の本当の成長に繋がります。Z世代の学生

から選んだ5つのテーマのうち1つについて、2日間かけて英語によるグループディスカッションが展開された。最終日には各グループが考えをビジネスプランにまとめ、プレゼンテーションを行った。

高校生たちは学校や学年の枠を超えて課題解決に取り組むことで、国際問題やSDGsに関する理解を深めることができた。同大学は今後も高校生が国際問題に触れられる機会の創出を推進していく。



参加者のスクリーンショット

SDGsを共通スローガンに、国境を越えて地球規模の問題に取り組む

関西学院大学生命環境学部および工学部は、2022年2月下旬・3月上旬に、協定校を含む海外の大学とのオンライン国

参加学生の声

1年にわたり企業や関連施設との調整・連携をしながらプロジェクトを進めました。特に難しかったのはSDGsと利益の両立。SDGsは必ずしも営利を目的とするものではありませんが、私たちの取り組みはビジネスであり、利益創出は必須です。この両立を日本旅行の担当者様と何度も話し合い、ご指導いただきながら進めていきました。納得できる商品が完成したのは、妥協することなく取り組んだ結果だと感じています。このプロジェクトを経て、1つの商品を開発するには、関係者の方との利害やコストの問題といったさまざまな困難があることを学びました。ビジネス的な感覚は、学生にとってはなかなかつかみづらいものです。それを養うことができた貴重な経験を、将来社会に出たときに活かしたいと思います。

商学部4年(当時)  
岡本 菜々恵さん



企業の声

弊社がSDGs宣言として掲げている「『人』『風景』『文化』という観光資源の保全を通して、将来にわたり持続できるツーリズム事業」を実現できる旅行商品を提案していただきたいと考え、今回のプロジェクトを実施しました。「SDGs=学びの旅」になりがちですが「楽しく旅行をしていると、それがいつの間にかSDGsへの貢献につながっている」という斬新な発想や、旅行のポイントとなる観光施設には現地に赴き実体験で納得できた施設を用意するという行動も、ツアープランナーの本来あるべき姿だと感じ、学生の皆さんから学ぶことが多かったです。今後も産学連携を通して、1+1=2ではなく、それ以上の価値を生み出すような取り組みを推進できればと思います。

株式会社日本旅行  
ツーリズム事業本部  
国内旅行事業部  
今村 智香様



高校生が国際問題に取り組む機会を創出する

私たちは新たな価値を見出し、それを自分たちでアレンジすることに長けており、さらにWeb上でのつながりをどんどん広げていくことも得意です。今後もそうした学生たちの実践の場を広げられるような産学連携事業に取り組んでいきたいと考えています」

関西学院大学、NPO法人国際社会貢献センター(ABIC)主催の「高校生国際交流の集い2021」が、2021年8月4・5日にオンラインで行われた。8つの高校から英語での国

際交流プログラム「Sustainable Energy and Biodiversity」をZoomで開催した。この取り組みは「国際青少年サイエンス交流事業」に採択されたもので、今回が2回目の実施となる。インドからアミティ大学とビヤニ大学、インドネシアからウダヤナ大学とパジャジャラン大学、また台湾から国立台湾師範大学と東海大学の学生計100名ほどが参加。初日には関西学院大学工学部藤原明比古教授および生命環境学部北條賢准教授による基調講演などが行われ、2・3日目は参加大学の学生から各国の現状に根ざしたSDGsへの取り組みについての調査報告があり、それに基づき活発な議論が行われた。



Zoom会議の背景として参加者に配布した画像

プログラム企画・総括を担った同大学生命環境学部藤博幸教授は、次のように振り返る。「国立台湾師範大学とビヤニ大学の双方から風力発電所の設置についての発表があったが、同じトピックでも設置場所など国による取り組みの違いが鮮明化され、興味深かった。また台湾の東海大学からは、植物・水・太陽光・酵母が植物利

用型微生物燃料電池におよぼす影響についての報告や、微生物を利用した海洋のマイクロプラスチック処理の研究についての報告など Sustainable Energyと Biodiversityの両方に関わる発表があり、幅広いテーマで議論を行うことができた」

このような実りある国際研究交流を行うことができるのは、世界各国に多数の協定大学を有する関西学院大学ならではの強み。同大学はこのネットワークを活かしながら、SDGsへの貢献に向けて教育・研究面での国際連携を推進していく方針だ。

お問い合わせ先

Kwansei Gakuin University

関西学院大学

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155

URL: <https://www.kwansei.ac.jp/>

東洋経済  
ACADEMIC

SUSTAINABLE  
DEVELOPMENT GOALS

We support the Sustainable Development Goals (SDGs)